

4

EPILOGUE



終章

島原万丈

LIFULL HOME'S 総研 所長

第 1 章

デンマークとの比較で 浮き彫りになった 日本の住まい方

本報告書の最後の考察に入る前に、日本とデンマークとの比較調査で明らかになった両国の住宅観や住まい方を本編53p~147pから抜粋する形で整理しておく。

世界一幸福な国として知られるデンマークは、やはり住まいも幸福なのか。だとすれば、生活者の目線でみて、それはどのような意識や態度で成立しているものなのか。そして、私たち日本人の住生活とはどこがどう違うのか。その差が浮き彫りにするのは、私たち日本人の住生活に対する冷静な自己評価である。

国際比較調査の結果をもとに提出される言説は往々にして、出羽守と揶揄されることがある。海外と日本では諸事情が違うので、参考にならないと批判を受ける。進んだ海外／遅れた日本という構図だけが強調された批判のための批判には、確かに意味がない。だが優劣の評価はひとまず留保するとしても、他国と日本にはどういう違いがあるのかという指摘に冷静に耳を傾けることは、決して無駄ではないと考える。違いを知るといことは、私たち日本人が常識だと思っている住生活が、決して絶対的で普遍的なものではなく、また、選択肢のないただ一つの現実ではなく、他にも違う住まい方が成立しうるのだという可能性を知ることでもある。

とはいえ、両国の住生活に対する主観的幸福（自己評価による幸福）の水準と、それを構成する住まい方の実態を並べてみると、デンマーク人に比べて私たち日本人の住生活の貧しさを認めざるを得

ない。少なくとも本調査が採取したデータから読み取れる状況からは、日本人のほうがデンマーク人よりも豊かな住生活を享受しているという見立てをすることは不可能だし、そもそも文化が違うのだから他国から学ぶべきことなどないと強弁するのは傲慢だ。

だからといってしかし、デンマークを理想郷としてあがめ、日本も同じ場所を目指せという話に短絡するのは無理がある。政策と市場を批判して溜飲を下げるだけでは意味がない。大切なのは、これまでの歴史の延長線上に自動的に引かれるものとして未来を受け入れるのではなく、違う未来の可能性を考えることである。

1

人生全般の幸福度について

調査のメインテーマである住宅観や住まい方の違いをみる前に、まず両国の幸福度の違いを確認しておく。

国連の「世界幸福度レポート(World Happiness Report)」のランキングを算出する元データになっている米国ギャラップ社の世論調査と同じ形式で聞いた人生全般の幸福度の平均点は、デンマーク人7.10点に対して日本人6.37点と、やはり本調査でもデンマークの幸福度の高さが確認される。ちなみに全国を対象に実施されるギャラップ社の調査では、デンマーク7.555点、日本5.915点。今回の調査では両国とも首都圏に限定したためギャラップ社の結果とはズレが生じているが、参考までに比較するとデンマークではグレーターコペンハーゲンの得点は全国平均を下回り、逆に日本では首都圏の得点が全国平均を上回っている。

今回の調査では、両国の幸福度を傍証するため自己決定感と自己肯定感を尋ねたのだが、幸福度の平均点以上にデンマークと日本で大きな差が表れた。

まず、収入よりも幸福度に影響するとの研究報告もある自己決定感^{※1}から確認する。質問文は「あなたは、『世間の常識や周囲の意見に流されず、自分の人生を自分自身で決めている』というのをどの程度感じているか?」である。この質問に対して、「とても感じている」と答えた割合はデンマーク人52.7%に対して、日本人は12.0%に過ぎない。「まあ感じている」まで合わせた割合で確認しても、デンマーク人では86.3%に達するが日本人では58.6%にとどまる。

次に「あなたは、今の自分をどの程度好きか」と聞いた質問では、デンマークでは「とても好きである」という回答が41.5%、「まあ好きである」が39.1%と、全体では80.6%の人が「自分が好き」と答えている。日本では「とても好きである」は6.7%にとどまり、「まあ好きである」の42.6%と合わせても、「自分が好き」と答えた人の割合は半数に満たない。このような段階式の選択肢を提示された場合、日本人はもっとも強い意志を示す選択肢を選ばない傾向があるとはいえ、自分のことが好きかと聞かれて「まあ好き」とさえ答えられない割合が半数以上にものぼるとは、やはり自己肯定感の低い国と認めざるを得ない。逆に「あまり好きではない」「まったく好きではない」とする回答はデンマークではほとんどみられないのに対して、日本では2割を超えている。(同書144p)

このようにシンプルな質問に対する両国の回答の違いからだけでも、日本の社会のあり方に対する問題提議になるが、本研究の守備範囲を越えるのでここではこれ以上は踏み込まない。

2

日本とデンマーク、 住まいの幸福度はどう違うのか

本研究のメインテーマである「住まいの幸福」に関しては、「いま

※1：西村和雄，八木匡（2018）「幸福感と自己決定——日本における実証研究」、『RIETI——独立行政法人経済産業研究所 ディスカッション・ペーパー』掲載

※2：傾向スコア分析の詳細については、『住宅幸福論 Episode1 住まいの幸福を疑え』114pを参照

の家に対する満足度」と「住んでいる街に対する満足度」、それらを総合的に考えた「住生活全般に対する満足度」と3つの質問を設定した。いずれも0点から10点の11段階の得点で回答させている。

なお、本報告書で紹介する満足度のスコアは、Episode1で導入した傾向スコア分析^{*2}をしていないため、持ち家と賃貸での満足度の違いには、世帯年収によるバイアスがかかっている。一般に世帯年収の高い人ほど広さや機能面で優位な持ち家に住む確率が高く、逆に年収の低い人はスペックの劣る住宅に住む確率が高いため、世帯年収の高さ／低さが住宅タイプ別の満足度を背後で左右しているのである。傾向スコア分析で世帯年収などによるバイアスを排除して比較すると、持ち家が賃貸か、マンションか戸建てかなど建物タイプによる満足度の差は、単純集計の結果ほどは大きくないことは、Episode1ですでに検証済みである。

本分析ではデンマークと日本の比較が目的であるので、特殊な操作はせずクロス集計の結果でみていく。

まず「街の満足度」からみていこう(図1)。いま住んでいる地域についての満足度は、デンマーク人は7.50点、日本人は7.06点と、その差はあまり大きくない。得点の分布を確認すると、デンマークでは9点と10点にも約20%の回答があるのに対して、日本ではそれぞれ10%前後にとどまり、28.5%の者が選んだ8点がピークになり、デンマークから一段低いゾーンに分布が集まっている。

属性別にみると、デンマークでは若年(20～30代)単身男性が唯一6点台になっているものの、全体的にみると世帯構成の違いによる平均点の差はとても小さい。日本では単身世帯の平均は6.66点で、2人以上世帯(7.19点)と比較して概ね満足度が低い。

住んでいる住宅タイプ別にみても同様の傾向がある。デンマークでは持ち家層7.71点、賃貸層7.35点と、持ち家層のほうがやや高い傾向はあるものの、その差は小さい。一方で日本では、持ち家層7.29

点に対して賃貸層では6.78点と、持ち家が賃貸かで落差を生じている。

「家の満足度」(図2)も、デンマーク人7.02点、日本人6.67点と、やはりデンマーク人のほうが日本人よりも自分が住んでいる家に対する満足度が高いことが確認された。両国とも最多のボリュームは8点であるが、9点と10点の割合がデンマークのほうが高く、日本では相対的に5～7点の分布が多くなる。

世帯構成別にみると、デンマークでも単身世帯は2人以上世帯に比べて満足度が低い傾向がある。とはいえ、単身世帯でも6.87点で、日本人全体での平均点を超えている。住宅タイプ別には、デンマークでは持ち家層が7.50と高く、賃貸層の6.71を上回る。さらに細かくみると、デンマークでは持ち家の戸建てが7.90でもっとも高く、持ち家の集合住宅の7.32、アンディール(コーポラティブ)の6.76を上回る。賃貸では戸建て7.03、集合住宅6.57と、持ち家と同様に戸建て住宅の居住者の満足度が高い。一方日本では、持ち家層の7.14に対して賃貸層が6.08と、デンマークとの対比でも日本では持ち家が賃貸かでの満足度の落差が大きく、賃貸住宅の満足度はデンマークより大きく見劣りする。賃貸住宅の中では賃貸戸建てが5.86と一段と低くなっている。

賃貸住宅を建物タイプ別に比べると、デンマークの賃貸戸建て7.03点に対して日本の賃貸戸建て5.86点。市場の賃貸住宅の多くを占める集合住宅をみるとデンマークでは6.57点、日本は賃貸マンションが6.15点、賃貸アパートが6.00点。日本の賃貸住宅では特に戸建てとアパートの満足度の低さが目立つ。持ち家の集合住宅に限れば、日本のマンションは7.33で、デンマーク7.32と同水準の満足度が得られている。

「街の満足度」と「家の満足度」をふまえた総合的な意見として

図1:「街」満足度







	デンマーク	日本	差(DK-JP)
			
	平均	平均	
	7.50	7.06	0.44
持ち家	戸建て	7.26	0.61
	集合住宅	7.48	0.40
	アンディール	—	—
	[計]	7.29	0.42
賃貸	戸建て	6.45	0.99
	集合住宅/マンション	6.90	0.37
	アパート	6.65	—
	[計]	6.78	0.57

図2:「家」満足度

	デンマーク	日本	差(DK-JP)
			
	平均	平均	
	7.02	6.67	0.35
持ち家	戸建て	7.17	0.73
	集合住宅	7.33	-0.01
	アンディール	—	—
	[計]	7.14	0.36
賃貸	戸建て	5.86	1.17
	集合住宅/マンション	6.15	0.42
	アパート	6.00	—
	[計]	6.08	0.63

「住生活への満足度」(図3)を尋ねた結果をみても傾向は同じで、デンマークの平均点7.35に対して日本は6.79と、0.5点以上の差がついた。同じ住宅タイプ同士で比べると、持ち家はデンマーク7.82点に対して日本7.21点。賃貸ではデンマーク7.04点に対して日本6.25点と、とくに賃貸の戸建て(6.19点)とアパート(6.13点)でデンマークとの差が大きくなる。

デンマークの中では、持ち家の戸建て居住者の満足度が平均で8点を超え、他の住宅タイプに比べても別格に高い。持ち家の集合住宅に限って比較すれば、デンマーク7.59点(アンディールは7.26点)に対して、日本の持ち家マンションも7.39点と健闘しており、デンマークと比べても住生活満足度の差は小さい。デンマークと比較することで、日本の賃貸アパート・戸建ての満足度の低さがあらためて浮き彫りになった形だ。

3

住生活の満足度と幸福の関係

住まいは人を幸せにするのか。これは住宅幸福論の根幹にかかわる問いであり、住まいの幸福度を考えることの重要性を訴える根拠となる。総合的な住生活満足度の点数帯別に、人生に対する幸福度の平均点を比べたところ、大きく2つのことがはっきりした(図4)。

まず1つめは、住生活の満足度は人生の幸福度に対して正の相関を示すということである。デンマークと日本の両国に共通する傾向として、住生活の満足度が高ければ高いほど、人生の幸福度が高くなる、逆に住生活の満足度が低くなればなるほど人生の幸福度も低くなる、というリニアな関係がくっきりと表れた。住まいは人を幸せ

にする。住いの満足度を高めていく試みはすべて、人を幸福にする試みにつながるということだ。

もうひとつのポイントは、日本では住生活の満足度が低い層で人生の幸福度が低下する傾向が顕著である点だ。住生活の満足度が9~10点の層と7~8点の層では、日本の幸福度もデンマークとまったく遜色がないレベルにある。ところが、住生活の満足度が6点を下回ると、日本の幸福度は下落傾向が大きくなりデンマークの幸福度を下回るようになる。住生活満足度が5~6点の層の幸福度は、デンマークの5.96点に対して日本は5.27点、さらに0~4点というもっとも満足度が低い層になると、デンマークでも幸福度が5.42点に低下するものの、日本では3.20点まで一気に下落し、大差がついてしまう。見方を変えると、日本はデンマークよりも、住まいの満足度(不満足度)が、人生の幸福度(不幸度)に直結しているとも言える。

仮に世界一幸福度の高い国と称されるデンマークを目標として、同等レベルまで日本人の幸福度を高めようとするなら(もちろん住まいだけで幸福が作られるわけではないが)、一つの目安として、住生活の満足度が6点以下の層を7点以上に引き上げるというKPIが見えてくる。日本では持ち家層の約半数、賃貸層の約7割は、10点満点で6点以下の自己評価しかできない住生活に甘んじている。

4

街と家の気に入っているところ

住生活の満足度がどのような要素で構成されているのか。そしてそれはデンマークと日本でどう異なるのか、あるいは共通するのか。いま住んでいる街と家のそれぞれについて、気に入っているところを

図3:「住生活」満足度







	デンマーク	日本	差(DK-JP)
			
	平均 7.35	平均 6.79	0.56
持ち家	戸建て	7.24	0.92
	集合住宅	7.39	0.20
	アンディール	—	—
	[計]	7.82	0.61
賃貸	戸建て	6.19	0.80
	集合住宅/マンション	6.35	0.68
	アパート	6.13	—
	[計]	7.04	0.79

図4:「住生活」満足度別にみた人生の幸福度

	デンマーク	日本	差(DK-JP)
			
	平均 7.10	平均 6.37	0.73
9~10点	8.26	8.33	-0.07
7~8点	7.04	7.03	0.01
5~6点	5.96	5.27	0.69
0~4点	5.42	3.20	2.22

※3: マズローは人間の欲求を「生理的欲求」「安全の欲求」「所属と愛の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」と5段階に分け、最終的には自己実現を目指して、低次の欲求の充足を満たしながら段階的に移っていくモデルを提示した。日本とデンマークという先進国を対象にした本調査では、生存欲求とも言われるもっとも低次の「生理的欲求」を割愛し、「安全の欲求」を「安全」と「快適」に分割している。

答えてもらった。

まずデンマークの街からみていく。いま住んでいる地域について「これ以上ないくらい気に入っている」と「とても気に入っている」という回答を合わせた割合は、「道路や交通機関などのインフラが整っていること」(57.2%)がもっとも高く、次いで「通勤・通学のしやすい地域であること」(52.8%)と交通利便性の良さについての評価が高い。3番めには「自然に触れられる機会が多いこと」(51.0%)、4番目に「自分らしくいられる街であること」(49.0%)が並ぶ。

対する日本のデータをみるとまず、特徴的に突出する項目がなく、いまその街に住んでいる積極的な理由が見当たらない。日本で上位に並ぶのは、いずれも回答の割合は少ないものの、多い順に「通勤・通学のしやすい地域であること」(20.7%)、「道路や交通機関などのインフラが整っていること」(19.7%)、「静かに暮らせる環境があること」(18.4%)、「街の治安が良いこと」(17.6%)と、交通利便性が高く平穏な立地が好まれていることがわかる。(同書116p)

実は提示した22項目は、マズローの段階欲求説を下敷きにして、安全性や快適性などの身体的な欲求に相当する項目から、所属、承認、自己実現の精神的な欲求に応える項目まで、段階的に並べている*3。デンマークの回答はすべての項目で日本を大きく上回っているが、日本では1割程度の回答しかない「自分らしくいられる街であること」「さまざまなチャンスに巡り合える街であること」「市民のサークルやクラブなどの活動が盛んであること」のような上位の欲求に属する項目についても4～5割の回答がみられ、デンマークと日本の違いが浮き彫りになっている。

同様に、いま住んでいる家の気に入っているところについても、マズローの段階欲求説を下敷きにした22項目を提示して尋ねた。ここでも、デンマークはすべての項目で日本のスコアを上回っている。

回答の多い順に並べると「友人を呼んで交流できること」(49.9%)、「持ち家であること」(48.0%)、「家族やパートナーと親密になれる空間であること」(44.7%)、「間取りの使い勝手が良いこと」(44.3%)となるが、マズローの言う「所属と愛の欲求」の段階に相当させた項目が上位にきていることがわかる。

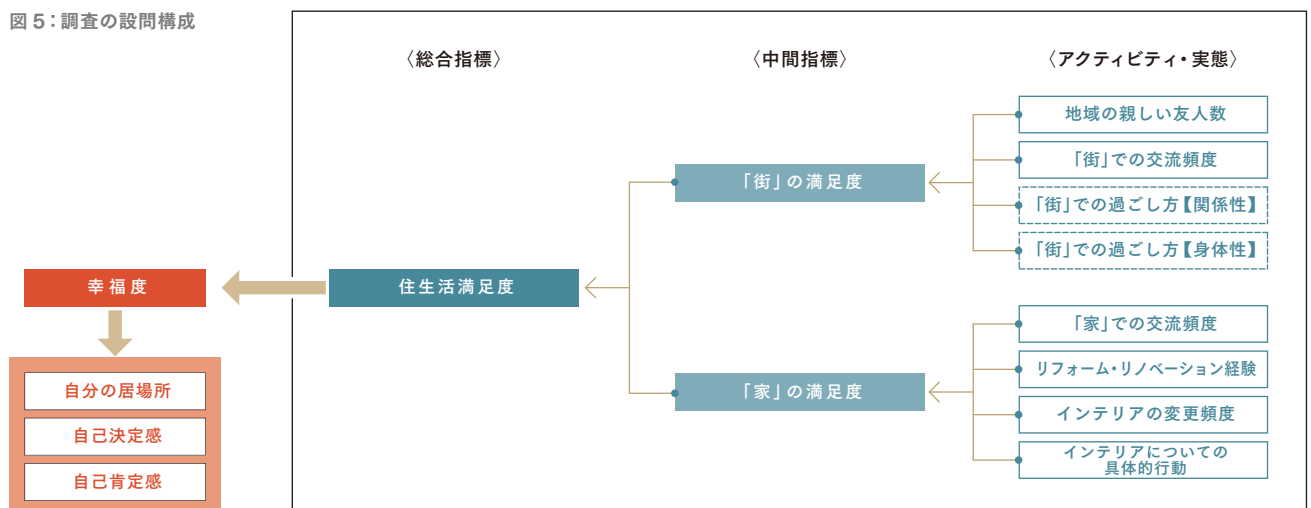
一方日本の回答の多い順では「日当たり、風通しが良いこと」(21.7%)、「持ち家であること」(20.4%)、「新築で購入・建設したこと」(16.4%)、「十分な広さがあること」(15.3%)、「内・外装がきれいであること」(15.0%)と並び、新築の持ち家であること以外には若干の快適性があがってくるにとどまっている。デンマークでは上位にあがっている「友人を呼んで交流できること」と「家族やパートナーと親密になれる空間であること」では、両国の差は30～40ポイントにもなり、日本の全体的なスコアの低さだけでなく、家で経験する時間の質の違いが鮮明である。(同書130p)

5

住まいの幸福度を高める暮らし方

住生活への満足度を高めるために重要なのは、ハコよりも暮らし方であるという『住宅幸福論Episode1』での結論をふまえ、今回の「日本・デンマーク住生活比較調査」は、図5のような設問構成で設計された。総合的な住生活の満足度は、大きく、住んでいる街への満足度と家そのものへの満足度に分解されている。そして街の満足度は、その街での日常的な経験によって形成され、家の満足度は住まい手がその家をどのように住みこなしているのか、住まい手と家との関係性が左右する。このようなモデルを仮説として設定し、街の

図5：調査の設問構成



満足度を高める暮らし方の実態は、LIFULL HOME'S 総研が2015年に発表した『Sensuous City [官能都市]』を下敷きにして、24項目のアクティビティで測定。家での暮らし方の測定のためには、大きく、1. 自宅に人を招く頻度、2. リフォーム・リノベーションの経験、3. インテリアへの関与の3つの領域の質問を用意した。

まず共分散構造分析でこのモデル全体に一定の説明力があることを確認したうえで、街の満足度と家の満足度を説明変数に設定して重回帰分析を行い、住生活の満足度へは街と家がそれぞれどの程度寄与しているのかを分析した。その結果、住生活の満足度へは、デンマークでも日本でも、街の満足度よりも家の満足度のほうがおよそ2倍の影響度(寄与度=t値)を持つことがわかった。街の満足度も一定程度の影響力はあるものの、やはり家が居心地の良い場所であることが住生活全般にとっていかに重要か、あらためて確認された形である。

次に、家の満足度にはどんな暮らし方が寄与するのかを、「家に人を招く交流頻度」、「リフォーム・リノベーションの経験」、「インテリアの変更頻度」、「インテリアに関する具体的行動の多さ」を説明変数にして分析したところ、日本とデンマークでは異なる傾向が表れた。

デンマークでは交流頻度の多さが家の満足度へもっとも強く影響しており、リフォーム・リノベーションの経験もプラスに作用している。一方、日本ではインテリアに関する具体的行動の多さが家の満足度に対して圧倒的に大きな影響を与えていた(図6)。日本では、家の満足度に対するリフォーム・リノベーションの寄与度(t値)がマイナスに振れていることは少なからず意外であったが、回答を詳しくみれば合点のいく説明が可能だ。

まず、住んでいる家のリフォーム・リノベーションの経験率は、デンマークでは43.2%あるのに対して日本では19.2%にとどまる。

デンマークでは賃貸住宅居住者ですら30.2%は経験しているが、日本の賃貸住宅ではわずか1.3%である。持ち家層に限っても33.0%と、デンマークの賃貸住宅と変わらないレベルである。(同書120p)

またリフォーム・リノベーションの目的を確認すると、日本とデンマークにおけるリフォーム・リノベーションの意味の違いが顕著に表れていた。デンマークでは「高機能・高性能な設備へグレードアップするため」(49.7%)、「家の快適性を向上させるため」(45.0%)、「好みのデザイン・インテリアにするため」(40.1%)と、家の居心地をより良くする意図が読み取れる。なので、デンマークではリフォーム・リノベーションの経験は、家の満足度に対してプラスに作用している。これに対して日本のリフォーム・リノベーションの目的は、「家の快適性を向上させるため」(41.3%)が最多であるものの、並んで「具体的な不具合や故障を直すため」(39.2%)と「古びた見た目をきれいにするため」(39.9%)があげられており、老朽化した家のマイナスをゼロに戻すための行為として位置づけられている。日本でリフォーム・リノベーションが家の満足度に対して寄与していないのはそのためだと思われる。(同書122p)

6

デンマーク人の 幸福感を高める友人との交流

9軒のお宅訪問をしたコペンハーゲン取材では、デンマークのインテリアのこだわりとセンスの良さを強く印象付けられたのだが、家の満足度への寄与度が高くなかったことは意外であった。デンマーク

図6:「家」の満足度 ← 「家」での交流頻度、リフォームリノベーション経験、インテリア変更頻度、インテリアについての具体的行動の重回帰分析/強制投入法
※デンマークは持ち家/借家のウェイトバック済み

	t 値			標準化係数(ベータ)			影響度(t値シェア)		
	合算	デンマーク	日本	合算	デンマーク	日本	合算	デンマーク	日本
「家」での交流頻度	6.6382	8.6331	3.3436	0.1394	0.2754	0.0796	43.1%	68.1%	28.3%
リフォーム・リノベーション経験(回数)	1.5578	2.8113	-1.1928	0.0284	0.0870	-0.0260	10.1%	22.2%	-10.1%
インテリア変更頻度(3段階)	0.2058	-0.3298	0.6276	0.0042	-0.0104	0.0151	1.3%	-2.6%	5.3%
インテリアについての具体的行動(回答個数)	6.9893	1.5591	9.0521	0.1376	0.0488	0.2128	45.4%	12.3%	76.5%
合計	15.3910	12.6737	11.8305	0.3096	0.4008	0.2815	100.0%	100.0%	100.0%

ではインテリアを良くする働きかけはどの家でも広く実施されているため、サンプルによって差が出にくく、家への満足度を高める要因としては説明力が高くないということだろう。それに対して、日本ではインテリアに関するアクションは少なく、具体的な行動をとる人と何もしない人の差が、家に対する満足度に大きく反映されるのだと思われる。

自宅に人を招く交流頻度がデンマーク人の家に対する満足度を高めていることは、多分に彼らの住宅観を反映しているところが多いと思われる。自分にとって家とは何かと尋ねた設問で、「家は友達や仲間を招いて交流する場である」という選択肢に対して26.5%のデンマーク人が「極めてよくあてはまる」と回答し、「よくあてはまる」という割合と合わせると、「家は交流する場」と考えている割合は58.6%にのぼる。この価値観は16項目の選択肢のうちでも「家は、自分を取り戻す場所である」(64.6%)や「家は、誰にも邪魔されずにリラックスする場所である」(60.4%)に僅差で並び、デンマーク人の住宅観の中心を占めている。(同書76p)

実際に自宅に人を招く頻度を確認すると(図7)、デンマークでは「1週間に1回以上」という回答が33.8%を占める。この割合は、単身者からカップル、ファミリーまであらゆる世帯構成で大差がなく、また戸建てか集合住宅かも関係なく、デンマーク人の一般的なライフスタイルであることがわかる。「月に1回以上」の割合は76.6%にまで達する。

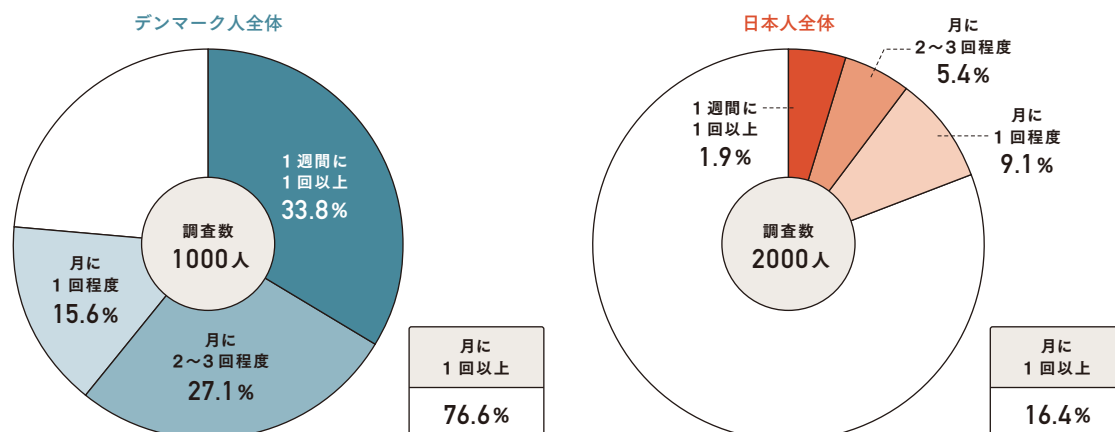
一方日本では、自宅に友人を招くことが「ほとんどない」と回答する者が半数以上を占め、「月に1回以上」の回答も16.4%にとどまる。ほとんどの属性で共通している傾向で、自宅で過ごす時間のありようはデンマークとは大きく異なっている。これには労働時間や

通勤時間の長さによる自宅で過ごす時間の短さや家の狭さの制約もあると思うが、気軽に行き来できる近隣に親しい友人が少ない、ということも影響しているかもしれない。いま住んでいる地域に親しい友人の人数を確認すると、デンマークでは14.9%に過ぎない「0人」が、日本では46.2%に達する。(同書106p)「センシユアス・シティ調査」で開発した質問項目で比較すると、デンマークに比べて日本では住んでいる街でのアクティビティ量が一般的に少なく、地域に友人をつくる機会も少ないことが想像できる。

日本人の友人を招く頻度の低さは、そもそもの住宅観によるところも大きい。16項目で尋ねた住宅観で「家は友達や仲間を招いて交流する場である」という選択肢に対して、「極めてよくあてはまる」と「よくあてはまる」を選んだ割合は日本では11.0%に過ぎない。全体的に低調な(ほとんどの選択肢に対して積極的な支持率が低い)日本人の回答の中で突出して高いのは、「家は心身の疲れをいやす休息場所である」(50.7%)と「家は、誰にも邪魔されずにリラックスする場所である」(48.9%)の2つである。デンマークとの違いを強調するなら、リラックスと交流という価値観がどちらも高く共存しているデンマークに比べて、日本人の住宅観の根幹にあるのは、家は外部を遮断した静かな休息場所であるという考え方である。(同書76p)

ヒュッゲな暮らしとしてホームパーティが紹介されることが多いことから想像できるのは、デンマークでは友人との交流もストレス解消の時間と考えられているのではないだろうか。対して日本では他者との交流はストレスとまでは言わないにしても、少なくともリラックスの妨げになると考えられているのだろう。

図7:「家」での交流頻度(全体/単一回答)
日頃、ご自宅に友人を招く機会はどの程度ありますか。





住まいの改善に意欲が低い日本人

「自分の住まいをより良くすることにどの程度気を配っているか」と尋ねると、デンマーク人と日本人の住まい方の基本方針の違いを簡単に知ることができる。

デンマークでは「とても強く心がけている」が15.2%、「強く心がけている」が26.1%。日本では「とても強く心がけている」は5.0%、「強く心がけている」は18.2%にとどまり、デンマーク人と比べると、日本人は日々の暮らしの中で自分の住環境を改善しようという積極的な意志が弱いことがわかる。(同書84p)

具体的に住まいを良くする方法として、グリーンやアートや写真を飾る、家具を吟味するなど、インテリアに関する行動を17項目の選択肢として提示し複数回答で選んでもらったところ、デンマーク人の平均回答個数は4.37、日本人は2.45という結果だった。そのうち「こまめに掃除や片付けをしている」は日本でも半数以上の者が回答しているので、掃除や片付け以外では1つまたは2つという程度である。

掃除や片付け以外で、デンマーク人がインテリアに対してとっている行動の多いものは、回答の多い順に、「インテリア用に観葉植物や花を飾っている」(47.8%)、「絵画やポスター、オブジェなどアート作品を飾っている」(42.3%)、「キャンドルやライティングを楽しんでいる」(39.3%)、「好きな家具を一つ一つ吟味して選んでいる」(30.7%)などである。

同様に日本人の回答も並べてみると、「簡単な補修やメンテナンスは自分でやっている」(23.1%)、「インテリア用に観葉植物や花を飾っている」(22.3%)、「絵画やポスター、オブジェなどアート作品

を飾っている」(17.3%)、「お気に入りの雑貨や食器を揃えている」(17.0%)となっている。列挙される行動の内容はあまり変わらないが、やっていると回答する割合がデンマークに比べて一様に低いことがわかる。(同書126p)



調査結果のまとめ

デンマークとの比較調査全体を通してまずみえてくるのは、日本人の住むことに対する関心の低さである。自分にとって家とは何か。自分にとっての理想の住まいとは。いま住んでいる街や家の気に入っているところはどこか。などなど、調査のほぼすべての質問項目について日本人の回答はデンマーク人を大きく下回った。段階式の選択肢で回答を求める質問では「そう思う」というポジティブな割合は一貫して低く、複数回答式の質問では回答個数が少ない。日本人が強い意見の表明を好まない傾向は指摘されるところではあるものの、それを差し引いてみたとしても、デンマーク人の住まいに対する意識との差は埋めがたいものがある。あくまで個人的印象だが、筆者が過去に経験した複数の国際比較調査の中でも、これほど大きな差がついた調査は珍しい。

デンマーク人と対比させることで浮き彫りになった日本人の住まいに対する関心の低さは、自ら自分の家の住み心地を良くしていこうとする意欲につながらず、具体的な行動を引き起こさない。住まいを語る言葉の少なさが示唆しているのは、家を住みこなすスキルの低さだ。デンマーク人の主体的な暮らし方は、住んでいる街での日常的な経験、人との交流、そしてインテリアでの家の改良など、住むことにまつわる具体的なアクティビティの多さに表れている。

デンマーク人と日本人の住まい方との違いを一言に凝縮するとしたら、それは、住むことに対する主体性の有無、ということになるだろう。

あらためて強調しておきたいのは、デンマークのほうが日本よりも住生活に対する満足度が高いというシンプルな事実である。日本人の住むことに対する関心の低さは、住宅に対する期待値を自ら低くとどめてしまう。期待値調整という言葉があるように、煩惱を捨てるように期待値を下げることで満足度を高めてくれるなら話は簡単なのだが、実際には住生活の満足度はデンマークより低い。

デンマークのみならず日本人のデータでも、住生活の満足度の高さが人生の幸福度に結びついていることが確認できた。住むことを良くする主体的な行為が、住む人を幸福にしているのである。これまで多くの著者が語ってきた通り、居心地の良さを意味するヒュッゲ (Hygge) という言葉で表されるデンマーク人の暮らしは、デンマーク人の主観的幸福の大きな原動力になっているようだ。

重回帰分析で確認すると、デンマーク人の家の満足度を大きく左右するのは、住まいの社交性であった。具体的には気のおけない友人たちや恋人や家族との交流である。デンマーク人は、日本人からすると驚くべき高頻度で友人を自宅に招く。親しい人と一緒にリラックスした時間を過ごすことで絆を深める場所。それがデンマーク人の幸福な住まい像である。その時インテリア空間は、自分の個性を表現しながら、相手を心地よくもてなす舞台になる。

日本では自宅に頻繁に人を招く習慣はないし、少なくとも今回調査対象とした首都圏では、通勤通学の利便性で選ばれた居住地は巨大な都市圏に広く分布する。仮にホームパーティをやるにしても、招かれた友人は残業が終わった後に電車で1時間近くかけてやって来ることになり、現実問題としてハードルが高い。労働時間や通勤

時間の長さもあり、地元で出歩く機会は少ない。結果として住む街にも友人はできない。住んでいる街で自分の居場所は家だけである。プライベートでは誰とも交わらず内向きに暮らす。このような傾向がもっとも鮮明に認められるのが、日本の独身単身男性の暮らしである。

リラックスに特化した空間に閉じこもるように暮らしているので、家の快適性は日本人の住生活の満足度を大きく左右する。この点において、広さや建物性能、設備の面で見劣りする賃貸アパートと賃貸戸建てが不利になる。

その一方で、日本ではインテリアで居心地を良くすることが、家の満足度に結びつきやすい。確かに日本人は家に対する関与度が低い。デンマーク人と比べると、家を良くしようという意欲も低いし、インテリアにかかわる具体的行動も少ない。グリーンや花、アート、家族の写真、お気に入りの雑貨など、自分が選んだもので部屋を飾ったり、家具を吟味して選んだりしている日本人は2割前後に過ぎない。

それでも日本人の中では、主体的にインテリアにかかわる具体的な行動をとっている者ほど、家に対する満足度が高いのである。そして家の満足度は、街の満足度の2倍強の寄与度で総合的な住生活の満足度を高め、住生活の満足度は人生の幸福度を高めることが確認されている。

彼我の差のあまりの大きさに脱力してしまうほどの調査結果の中で、これは希望の持てる発見である。家の面積はすぐに広がらない。サブリース業者の違法建築のニュースをみていると、賃貸アパートの建物品質の向上も前途多難であると思わざるを得ない。日本の住宅事情やライフスタイルからすると、デンマークのようなホームパーティ文化を広く根付かせることも難しそうだ。そんな中で、日本人の住生活の幸福を考える手がかりとして、インテリアに注目することは、現実的で悪くないアイデアだと思う。





第 2 章

インテリアを考える

住宅とインテリアの接近

1

住まい産業の中の インテリアの立ち位置

「家具や什器が住宅を住まいとして成り立たせている」と、デザイン評論家の柏木博は、インテリアに光を当て家という居場所の意味を読み解いた（『わたしの家 痕跡としての住まい』2013年、亜紀書房）。このような発想は、日本の住宅の供給を受け持つ建築・不動産の業界サイドには、これまでなかったものだ。

日本の住宅建設と流通にかかわるメインプレイヤーである建築業界と不動産業界は、インテリア産業を住宅産業の一員として見なしてこなかった。家具やファブリック、家電、雑貨、アート、グリーン、食器にキッチン用品などなど、それらは消費財であり動産であり、不動産や建築の後に付随するもの、住まい手が勝手に付け加えるもの、として軽視してきたと思う。当のインテリア業界から発信される話題は概ね、おしゃれな空間づくり、ワンランク上の上質な空間づくりのような、表層的なスタイルを追うノウハウがほとんどだった。

建築とインテリアの分断は建築設計事務所のポートフォリオを見れば、納得してもらえらると思う。建築家の作品として紹介される新築住宅の写真の多くは、家具や家電製品に子供のおもちゃ、その他生活に必要なあれやこれやの雑多なモノが搬入される前に、竣工時にあわてて撮影されたものだ。建築家にとって施主が暮らし始めた後の様子を見ることは仕事の喜びの一場面である。同時に本音としては見るのが怖い不安な瞬間なようでもある。自分のデザインした美しい空間が、自らの美意識に沿わない雑多な痕跡でけがされているのを見るのがつらいからである（同情する部分もないではないが）。

もちろん壁紙や床材や設備や造作家具はインテリアの一部ではある。しかし建築家にとって、建築物と一体化していないインテリアは、自分の仕事の範疇ではなかった。つい10年くらいまでは、建築家を名乗る設計士の中には、リフォーム・リノベーションをしょせんインテリアの仕事だろうと見下す者もいたくらいだ。言葉の端々に、彼の頭の中にある業界の序列（建築→→|→リフォーム→インテリア）の優越感が透けて見えた。

賃貸管理や中古流通を受け持つ不動産業界の視界の中には、インテリアは存在すらしていないかもしれない。建築と一体化した床

や壁紙や設備ですら、おそらくインテリアであるという認識すらなかっただろう。インテリアに関心を向けることがあるとすれば、故障や不具合でクレームになるときか、顧客の不満原因になるときくらいである。それ以外は単なる残置物だ。

分譲住宅を販売するデベロッパーやハウスメーカーは、専門のコーディネータを起用しモデルルームや展示場のインテリアを素敵に演出するため、相対的にはインテリアに関心がある業界のようにみえるかもしれない。しかし、そこに置かれている家具類は、部屋を広く見せるために、通常の使い勝手を基準にすれば一回り小さいサイズのもの巧妙に選ばれている。薄型のテレビが普及する以前には、リビングルームを圧迫するブラウン管テレビは置かれなかった。最近の新築マンションでは、床面積の圧縮で収納スペースは明らかにじめられているにもかかわらず、それを補うための収納家具はあってはならない。モデルルームでは暮らしのリアリティは重要ではなく、インテリアはハコを売るための小道具に過ぎない。オプション会の呼び名が示す通り、契約後の追加物というのがインテリアの正位置である。そのためか、新築分譲住宅を購入する消費者は、インテリアには関心が低い傾向がある（LIFULL HOME'S 総研『STOCK & RENOVATION 2014』、64p）。

2

住宅とインテリアは 同じテーブルにつけ

デンマークと日本の住まい方の比較調査を軸とした今回の調査研究を踏まえ、『住宅幸福論 Episode2』は、これまで主に不動産と

建築が独占してきた住宅市場の中で、インテリア産業が正当な位置を占めるように提案したい。その理由はなにも、日本の住まいもデンマークのように素敵でおしゃれになるべきだ、ということではない。

第一に、前項の調査結果の解説でも記したように、日本人の住生活の満足度を高める要因を分析したところ、自宅のインテリアに働きかける具体的な行動の多さが、家の満足度を高めていることが明らかになったからである。なぜインテリアが住まいの幸福度を高めるのかについては、この後で詳しく述べる。第二に、現状では日本人全体では住まいの居心地を良くしようとする意欲は低く、具体的な行動をとるものはまだ少数派であることがあげられる。インテリアに対する関心を持つようになるためには、なんらかの働きかけやきっかけが必要だからである。にもかかわらず、直前で述べたように不動産と建築を中心とする現状の住宅業界も、全体として見ればインテリアを重視していないことが3つ目の理由である。

そしてもう一つの根拠を付け加えるなら、すでに先駆的な動きが出てきており、まだ試験的な取り組みではあるものの、成果が期待できそうな段階に入っていることがあげられる。3章で中川寛子が取材記事をまとめている。

住宅業界とインテリア業界が協働する動きが、リノベーション市場から起きているのは、たまたま偶然というわけではない。リノベーションの黎明期から、インテリア業界はリノベーションに深い関わりを持っていた歴史がある。日本の一般向けメディアで初めてリノベーションを紹介したのは、『エスクァイア日本版』2001年6月号の「リノベーション新世紀。」という特集だが、「リノベーションを創りたいクリエイターズ・オフィス&ショップ」というコーナーで紹介された16の事業者のうち半分は、IDEE、hhstyle.com、AREA、WISE・WISEなど、いまでも健在のインテリアショップだ。リノベーション



『STOCK & RENOVATION 2014』
2014年（LIFULL HOME'S 総研）



『エスクァイア日本版』
2001年6月号（ハースト婦人画報社）

住宅市場の黎明期を牽引したのは、中古マンションのリノベーションである。それは、区分所有のハコの内部空間を仕事の対象とするため、建築とインテリアの境界線は曖昧だったのだ。

いまや完全に一つのジャンルとして定着した住宅リノベーションビジネスは、建築設計と不動産仲介の業際を融合させた新たなビジネスモデルとして生まれた。2000年を挟んでいち早くリノベーション専門ビジネスを立ち上げた、株式会社アートアンドクラフトと株式会社ブルースタジオがパイオニアである。この2社の登場以前には、建築と不動産仲介は専門知識的にもビジネスモデル的にも、また人材や組織の志向的にも異なる領域であり、大きくは同じ住宅産業に属しつつも異なる業界として交わることがなかった。この2社が、中古住宅を買ってリノベーションするという新しい住まいのあり方を提案しようとしたとき、必然的に業界の壁は取り払われる必要があった（LIFULL HOME'S 総研「リノベーションクロニクル」、『STOCK & RENOVATION 2014』、174-195p）。

いまになって振り返れば、それは極めてシンプルなロジックだった。消費者にとって住宅とは不動産でもあり建築でもある。リノベーション住宅は、中古不動産と建築の両方をまたいで初めて成立する。もし消費者にとって住宅とは、不動産でもあり建築でもありインテリアでもあるという構想が可能なら、リノベーション事業者がそうしてきたように、ユーザーオリエンテッドという極めて真っ当な行動指針によって、インテリア業との壁も取り払われるだろう。

リノベーション事業者は、不動産／建築とそれぞれ分断していた住宅を、住宅＝不動産＋建築という公式に書き換えた。そして昨今増加しているインテリア事業者とのコラボレーションは、その公式をさらに、住宅＝不動産＋建築＋インテリアと書き換えようとする試みであり、新たな業態が生まれる胎動かもしれない。注意深く観察

したい。

個人宅で取材にご協力いただいた「家具美術館な家」（191p）は、本報告書が提唱したいインテリアと住まいと幸福の関係を示す、純度の高いサンプルである。

この住宅作品の最大の見どころは、デンマークの名作家具が美術館のように展示された美しく端正な空間、というわけではない。

施主の角田氏は、もともと家具や家に関心が高いほうではなかった。4年間暮らしたデンマークで、たまたまアンティークマーケットで出会ったソファから北欧家具に興味を持つようになり、徐々に買い揃えていったそうだ。帰国にあたって住まいを探す際には、デンマークで集めた家具が生かせる広さが必要で、中古マンションのリノベーションを選択し、一つ一つの家具のサイズを測り、配置を優先したデザインを依頼した。デザイナーは石庭をつくる庭師のような慎重さで、一つ一つ思い入れのつまった家具の配置を90㎡の空間に設計した。住宅デザインの現場では、建築が主役であり家具などインテリアは脇役というヒエラルキーが相場だが、この家はその主従関係を逆転させたのだ。住まいづくりの新しい潮流を予感させるケースである。

角田氏は、季節ごとに小物やファブリックで模様替えをするなど、この家に住み始めて暮らしが変わったと言う。バス便の古い団地の1階は、一般的な不動産市場で言えば不人気な物件だ。しかし角田氏にとってはここが幸せな居場所だ。「毎日見る家具が嫌だったら毎日が嫌だから、そこにはこだわら。自分の暮らしがまずあって、そこから家を選ぶ」と、デンマークで影響を受けた価値観を語る。ご家族の幸せな住生活の出発点は、一つの小さなソファだった。



本書191pより「美術館な家」

1

「私らしい家」という困難

住まい手は「私らしい家に住みたい」と願う。住宅デザイナーは「あなたらしい家をつくる」と提案する。メディアは「あなたらしい家が素晴らしい」と啓蒙し、有識者は画一的な住宅供給を批判する。誰もが、自由な住まい手の個性として「らしい家」の尊さを強調する。お宅訪問をして話を聞いたデンマーク人は、「家は私のアイデンティティの表現だ」、「家は自己紹介だ」と、家の「私らしさ」を口々に語ってくれた。取材チームもそれに感銘を受けた。

では、「私らしさ」は、どのようにして空間化することが可能になるのだろうか。一般人の家づくりは、運慶が木材の中に埋まっている仏を削り出し、ミケランジェロが大理石の中に閉じ込められた天使を自由にするために彫り出すように、空っぽの空間にいきなり「私らしさ」を描き出すことはできない。

柏木博は、モノによるコラージュ機能に着目し、インテリアが換喩として私を表象すると論じた。「アイデンティティの表現」と語りながらデンマーク人が見せてくれたのは、確かに広義にインテリアと定義される内部空間の設えだった。例外は、すべてオーガニックな材料で建てたエコヴィレッジくらいだ。

わたしたちの住まい、そして室内は、わたしたち自身が集めたものに

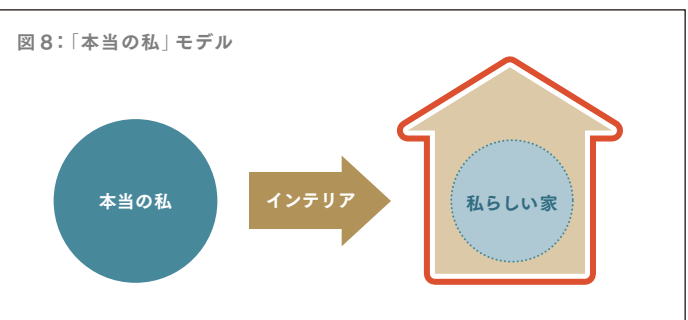
よって埋められている。家具、食器、衣服、書物、そのときどきに好ましく感じて買ったものや必要にせまられ購入した道具など、数多くのも。それらのものは、そこに生活している人物を表象しているといえる。ものは、それを所有している人間の換喩（メトニミー）になっていると言っている。（柏木博『わたしの家 痕跡としての住まい』2013年、亜紀書房、239-240p）

インテリアというモノを介して、「私らしさ」が住宅に映し取られる関係が、説得力をもって示されている。ただし、ここには一つ的前提が必要になる。それは、「私らしい住まい」が成立するためには、出発点に自分の「私らしさ」が特定されなければならないという前提である。

英語で個人を表す「individual」という言葉には、分割できないという意味が含まれる。アイデンティティ「identity」とは、他の誰かではない自己として識別される同一性である。それがインテリアを介して空間化するとしても、まずそこに分割不能な私の自己同一性、すなわち曖昧に揺れ動くことのない確かな「本当の私」が必要なのだ。

この「本当の私」を起点としてインテリアを介して「私らしい家」をつくる行為をモデル化すると、図8のように「本当の私→インテリア→私らしい家」となる。

ところがここに困難がある。私とは何者か。自分らしさとは何か。本当の私とは、確かな私とは、いったいどんな人間なのか。このような問いに明快に答えることは、当の本人にとって難儀なことである。「私」は、私を取り巻く環境や自分の気まぐれに左右され、時と場合によって揺れ動く。私がこれまでしてきた思考や言動に厳密な一貫



性や同一性があるわけではない。むしろ自分のことをよく知っているが故に、自分こそが一番「私」を語る事が難しい。自分探しの旅は往々にして、収束不能な混乱のうちに有耶無耶な開き直りに着地する。世界中のどこを探しても、これがお前だと「本当の私」を記してくれている石碑などないからだ。

そもその話として、この私は本当に存在しているのか。胡蝶の夢ではないのか。歴史上の哲学者たちが取り組んだ最大の仕事は、自分という存在の確かさを問うことだった。私たちに「私」は、それくらい厄介な問題なのだ。最新の脳科学は、人間の記憶や思考や想像は単なる脳内のシナプス・ネットワークを走る電気信号であることを突き止めたが、心は依然謎に包まれたままである。

2

本当の私を疑え

さて、確かな私の個性を先立たせることが困難だとすれば、「私→インテリア→家」による「私らしい家」は成立し得ない。「本当の私」を出発点とする限り、自分探しの旅と同様に、有耶無耶な「私らしい家」しか着地点はない。

「本当の私」を出発点としなくても「私らしい家」ができ上がる、そんな魔法はあるのか。隘路の突破口は、フランスの哲学者ジャン＝ポール・サルトルの「実存は本質に先立つ」という言葉に求められる。

実存とは、「本質存在」に相対する「現実存在」を短縮した言葉である。雑な意識になるが「実存は本質に先立つ」とは、いまここにこうして存在している私の主観的な現実が、可能性として存在する本質よりも優先される、という意味である。

本質的な存在とは理性的な私のことである。これは弁証法で有

名なヘーゲルが確立した哲学の人間観だ。ヘーゲルによれば、主観と客観や個別と普遍など一見対立してみえるものも絶対精神で統合されていて、絶対精神が意識として現れた理性として個人も合理的な体系の一部に同一化される存在であるとされる。「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」と、理性（概念）と現実（存在）をシームレスに繋ぐヘーゲルの盤石な哲学的体系は、世界を一つの説明原理で統合しようとする、ギリシャ哲学由来の合理主義的な性格を持っている。

当時絶大な影響力を誇っていた大哲学者ヘーゲルの思想に最初に異議を唱えたのは、19世紀のデンマークの哲学者セーレン・キルケゴールである。サルトルの哲学のベースになっている人間観は、デンマーク発のアイデアだったのだ。キルケゴールは、ヘーゲルによる合理的な世界における理性的人間像を受け入れなかった。ヘーゲルの世界は客観的な真理で成り立っており、そこに属する個人もまた本来合理的な存在である。これに対してキルケゴールが考えた個人は、さまざまな欲望を持ち、自分で選択し行動し、その結果いちいち悩み苦しむ、非合理的な存在である。したがって世界は主観的に経験される。キルケゴールの人間像は、ヘーゲルの盤石の哲学体系を台無しにするほどのインパクトを持っていた。

キルケゴールが端緒を開いた実存主義を完成させたサルトルは、「人間は、最初は何ものでもない」と、理性によってあらかじめ定義される人間像を退け、「自らつくったものになる」新たな人間像を打ち立てた。

人間は彼自身の投企以外の何ものでもない。彼は自己を実現するかぎりにおいてのみ存在する。したがって彼は彼の行為の全体以外の、彼の生活以外の何ものでもないのだ。（ジャン＝ポール・サルトル、

伊吹武彦・他訳、1996年、『実存主義とは何か』人文書院、60p)

人間は自分が自分で創りだすものである、と主張するサルトルの哲学は、「個人の選択の自由」で貫かれている。そのためには、全能の神であれ客観的な合理性であれ、自分以外の何者かに、あらかじめ自分の本性を定められているわけにはいかない。人間の本性などというものは存在しない、すなわち「無」だと。それがサルトルの出発点である。無の状態から無限に開かれた可能性に自ら身を投じていくことで、自分を創っていくのが人間だ。「投企」とは、自らの可能性を追求する自由な企てのことである。サルトルは、ある個人はその人の生活以外の何者でもないと、自由な意志で自己決定していく人間像を打ち立てた。

サルトルのこの考え方は、私たち日本人には馴染みのある仏教の考え方にも通じるところがある。諸法無我。諸行無常と並ぶ仏教の基本的理念の四法印のひとつで、すべては繋がりの中で変化している、いかなるものにも実体はないという教えである。「無我」とあるように、永遠不変の私という私の本性もない。

本職の住職も舌を巻くほど仏教に造形の深い、イラストレーターのみうらじゅんは、諸法無我を解釈したうえで、「自分探し」ではなく「自分なくし」をしると独自の幸福論を提唱する。彼らしいトリッキーな表現だが、「自分なくし」が意味するのは、なりたい自分へ自分を変えていくために、ありもしない「本当の私」への拘泥を手放すための技術である。その試みの先に、自分を変革する契機が見つかるという。

それは誰かに「憧れ＝なりたい」と思うことです。(中略) 必死で真似をしているとき、自分はなくなっています。(中略) 年を取ると、積み重なった「自分らしさ」が邪魔をして、すんなり他人に憧れること

ができず、また自分を変えることにも抵抗を抱くようになります。「自分なくし」というのは、自分を変えるためにリセットするという考え方もあります。(みうらじゅん、2011年、『マイ仏教』新潮社)

人の真似をする、という表現に違和感がある人もいるかもしれないが、あまり狭い意味に考えなくてもよい。この主張の核心は「自分を変える」だ。憧れる・なりたい何者か＝なりたい・理想の自分(≠本当の私)でもいいわけだ。「自分なくし」は、「本当の私→私らしい家」モデルの不可能性を乗り越えるための議論の道筋を用意してくれる。

サルトルでもいいし、みうらじゅんでもいい。確かな自分、本当の私という前提を退けることは、なにも自分が無個性で何者でもない、つまらない存在になってしまうということではない。「本当の私」を保留することで、私たちは、自分で好きなように自分を創り出す力を手にする。「投企」や「自分なくし」は、人はだれでも、なりたい自分になるために未来に向かって変わっていきけるのだという、人間の可能性を広げてくれるポジティブな姿勢である。

3

住まいの幸福とインテリア

ここでいま一度デンマーク人の住まい方を思い出してみよう。「家は自分のアイデンティの表現」と語るデンマーク人は、定量調査で確認すると、家をより良くすることにとっても熱心だ。リフォーム・リノベーションで家をグレードアップし、日本人よりも頻繁にインテリアの模様替えをし、家具を吟味し、グリーンやアートで部屋を飾るなど、インテリアに対する具体的な行動を多くとっている。「家はアイデ



ンティの表現」というデンマーク人の住まい方は、「本当の私」モデルで説明しようとする少し奇妙なことになる。もしデンマーク人が強固にアンデンティを自覚していて、巧みなインテリア術で「私らしい家」をつくることのできるなら、「本当の私→インテリア→私らしい家」に従って、デンマーク人の家づくりは一度で完結してもよさそうなのだ。ところが実際には彼らは頻りにインテリアに手を加え、住空間の改善に余念がない。もしデンマーク人が家づくりに失敗ばかりしてその修正に追われているのだとすれば、満足度の高さが説明できない。なぜだろうか。

そこでデンマーク人のそのような暮らし方は、サルトルの言葉でいえば投企、みうらじゅんに言わせれば「自分なくし」に他ならないのではないかと考えてみる。出発点にあるのは、揺るぎない「本当の私」ではなくて、いま、ここにこうして存在している「とりあえずの私」である。その私が、インテリアを通して住空間に働きかけ、そこに「可能性としての私＝なりたいたい私」を投影する。本人の口から語られる時は「自分のアイデンティを表現した」空間というストーリーになるとしても、実際には「とりあえずの私」が、その時に「なりたいたい私」を映し出した空間だとすれば、常により良い状態を目指して進化・成長していく余地が残る。すると、住まいは自分と一緒に変化しつつ、常にその時点でのベストに近い状態にあることが可能になる。

しかしそうしてでき上がった空間＝インテリアが、どの程度「なりたいたい私」の目論見を達成しているのか、自分だけで評価ができるわけではない。美術評論家の多木浩二は、住み手は自分の家の空間の意味を正確に語るができないと、他者の視線の必要性を指摘する。

たしかに住み手は自分の家をすみずみまで使いこなし装飾するにも拘わらず、自分の家に含まれている意味について、正確に語る

できない。かれは自分の行動のごく一面しか理解していないのである。ところがわれわれが他人の家を訪れてみると、その家は住み手が決して意識的に語らぬ側面を語りはじめる。道具の表情や気配、それらの配置などがそれを仕立てた筈の人間の意識をこえてひとつの謎めいたメッセージになりはじめるのである。(多木浩二、1993年、『生きられた家』青土社、100p)

デンマーク人はまた「家は自己紹介」とも語っていた。ホームパーティが日常的なライフスタイルとして根付いているデンマークでは、はじめての友人を招いた時には、かならず家の案内ツアーから始まり、パーティではインテリアは定番の話題だそうだ。

そのように家を舞台にした交流が、デンマーク人の住生活の幸福を高めていることはデータでも実証されたわけだが、ここでは多木の主張を受け入れ、他者との交流がもたらす作用について、もう少し踏み込んでみたい。

多木は、住み手は自分の家について正確に語ることはできない。しかし他人の家については、住み手が意識していなかった意味までちどころに分かると述べる。それに従えば、ホームパーティが盛んなデンマークでは、自分すら気づいてなかった自分の家の意味を読み取ってくれる他者の視線を、日常的に自分の家に招き入れていることになる。また自分が友人の家に招かれる時は、逆に他者の視線で友人の家を眺める。そしてパーティの話題としてインテリアについて語り合うことで、互いの目に映る互いの家の意味を交換しあっているのだ。しかもそれが多対多のポリフォニックな空間で、人生をかけて繰り返し繰り返し続けられているのである。住まいを語る言葉が豊かに鍛えられるのも当然だ。

家を舞台にしたそんな交流によって得られるのは、自分の家に対する相対化された視線である。その時自己紹介されているのは「本



当の私」ではなく、「なりたい私」だ。どんな家でも、生活機能として置かれたアイテムには大差がないはずだ。キッチン、家電製品、照明、ダイニングテーブル、チェア、ソファ、ファブリック、オーディオ、本、その他諸々などなど。だがしかし、どんな家具を選び、どのように配置し、壁に何を飾り、どんなキャンドルを使い、どんな音楽を流し、空間をどのように演出するかは、各人の「なりたい私」によってまったく異なる。その違いの中で自分の家を見つめ直し、空間化された「なりたい私」を事後的に了解する。同時にそこには何らかのギャップ、ズレ、不徹底が見つかるはずだが、それを修正しようとする時、次の「とりあえずの私」に向かうフィードバックが生まれる。

これをモデル化すると図9のように「とりあえずの私→インテリア→なりたい私→交流→了解された私」となるが、このモデルはそこで止まることなく、「→とりあえずの私」へとフィードバックループする。

そのフィードバックによって、「住むこと」は、一連のプロセスとして歩みを止めることのない再帰的な運動となる。この運動体を駆動するのは私の主体性である。主体性とは、自分の意志・判断によって行動する態度や性質のことであり、そこには自分の判断による行動に対するリスクは自分で責任を取るという含意がある。だから「なりたい私」になろうとする主体的な住まい手は、たとえそこが賃貸住宅であろうともその空間の主になれるのだ。

この一連のプロセスは、住まいによって「なりたい私」を自ら作っていく暮らし方と呼んでも差し支えないだろう。それは、デンマークでは交流によって後押しされるが、人を家に招く習慣のない日本では自分一人で成されなければならないという違いはあるものの、住まい手が自ら幸せになろうとする態度や心構えを住まい手に要求する暮らし方である。

賃貸住宅に暮らす人や分譲住宅や中古住宅を買う人にとっては、建築は既に存在している。完全オーダーメイドの注文建築であって

も、いったん竣工すれば建築は与件となる。なので、一般的な住まい手が自分で住空間に働きかけることができるのは、主にインテリアと呼ばれる領域である。だから住まいの幸福にとってインテリアが重要な鍵を握っているのだ。

4

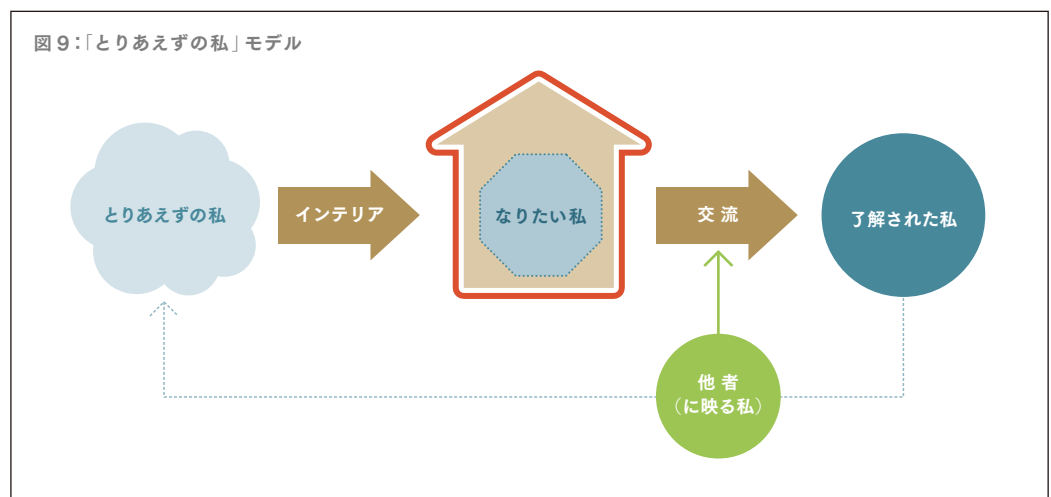
私らしさの正体

ここでまた、みうらじゅんに登場願おう。みうらの「自分なくし」を、住まいづくりのモデルに重ね合わせて、「私らしさ」についての考察を補強してみたい。

みうらは「自分なくし」で、リスペクトする憧れの対象を真似ると説いた。しかし、どれだけリスペクトしても、どれだけ真似をしても、完璧に憧れの人物になりきるのは不可能である。しかしみうらは、まさにその失敗にこそ自分の個性が見出される、と言う。

リスペクトする人をどうしても真似しきれなかった余りの部分、いわゆるそれが「コンプレックス」というやつですが、そのコンプレックスこそが「自分」なのであって、それこそが「個性」なのです(前掲書)。

みうらの言う、どうしても真似しきれなかった「余りの部分」とは、「とりあえずの私」モデルにおいて、「了解された私」の失敗部分、つまり思惑とのギャップやズレに符合する。そこは、次の「とりあえずの私」へフィードバックしていくループのエネルギーを生む場所である。つまり「なりたい私」に向かって、自らを変化させるエネルギーが生まれるところである。それこそが「個性」だと、みうらは主張しているのである。言い換えると、「個性」=「私らしさ」とは、「本当



の私]ではなく、「なりたい私」に向かう主体的なベクトルなのだ。

少々強引に結びつけたかもしれないが、これで視界がクリアになった。「私らしさ」と「インテリア」と「住まい」と「幸福」の関係が整理できたと思う。

揺るぎない「本当の私」が「私らしい家」を作るのではない。素敵なおインテリアがすなわち幸福な住まいを約束するわけではない。「本当の私」をいったん括弧に入れて「とりあえずの私」という、ある意味で不確かな個性(=変わることができる自分)を受け入れ、少しずつでも「なりたい私」になろうと主体的に家に関わり続けることで、住まいと幸福を結ぶ回路は開かれるのだ。あるいは、そのプロセスそのものが幸福な住まい方なのかもしれない。

この考え方は、誰もがいまいるその場所から、一步でも二歩でも幸福に近づくことを可能にするリーズナブルな処方箋ではないかと考える。経済的にも成功した豊かな人が、ステイタスの高い街に高品質な住宅を手に入れることだけが「住まいの幸福」なのではなく、自らが主体的に「なりたい私」になろうとする、その住まい方こそが「住まいの幸福」なのではないだろうか。

Episode1の調査では、世帯年収が低くスペックの低い住宅に住んでいるなど、確率的には住まいの幸福度が低いグループに属するにもかかわらず、住まいの満足度が高い人を抽出し、なぜ彼らは不利な条件下でも高い満足度を得ているのかを分析した。その結果見つかったのは、ハコではなく家での暮らし方の特徴だった。例えば、住み替えによって、住んでいる街を好きになったり、家で過ごす時間を楽しむようになったり、家の経年変化を楽しんだり。要するにこの人たちは、家によって自分を変えた人たちだったのだ。当時は見抜けなかったが、ここに幸福な住まいへのヒントがあったのだ。

一般論的でかつ印象論になってしまうが、幸福度が低く不平不満の多い人は、自分の不幸は環境や社会や、あるいはまったくの不運のせいだと考える傾向があるように思う。自己肯定感が低い人は、他人と自分を経済力や社会的地位など、単純に優劣がついてしまう物差しで比較してしまうように見受けられる。確かにいまの日本社会に残酷な弱肉強食の一面があることは否定しない。個人的にそれで良しとも思わない。だがそれでもなお、自分で自分を幸せにするためになにか自分を変えようとしているのか、という態度は問われるべきだと思う。

社会が悪い、政治が悪い、市場が悪い、他の人に比べて不遇だ、自分はダメだ。なりたい自分なんてない。そのようなあきらめの中には、変わることを頑なに拒み続ける「本当の私」という幻が潜在していないだろうか。自分らしくありなさいと幼い頃から教え込まれ、同時にその一方で、世の中の普通を押し付けられ他人と比べ続けられてきたため、硬い殻で守り続けた尊い自分らしさが、心の核のあたりを専有していないだろうか。残念ながら、どうやら、そいつはあまり役に立ちそうにない。

3章で菊地マリエが紹介するように、デンマークの教育では、徹底したディスカッションによって、自分にとって何が心地よい状態かを考えさせるという。ディスカッションとは自分の優秀さで相手をねじ伏せていくことでも、打ち負かされて妥協を迫られることでもない。議論によってつくられる自分とは、他者との意見の相違の中で自分を相対化し、変化することを受け入れることで、だんだんと練り上げるように作られる自分である。

このように育てられる個人の生き方の態度が、さまざまな社会制度に先立って、デンマークの幸福度の土台を支えているのかもしれない。この見方にもし一片の妥当性があるなら、デンマーク人の住生活満足度の高さも同じだろう。抑制のきいたヒューマンスケール

な都市計画の快適さや、高い断熱性能を備えた歴史的ストックの豊かさや、インテリア・プロダクトの優れたデザインなど、確かにそれら、デンマークの住生活を形作る環境要因は素晴らしい。だが真似できない。まったく異なる歴史を持つ都市計画や住宅政策をただちに方向転換したとしても、私たち日本人がそれを手にするのはいつのことか。待てない。

しかし、デンマーク人の主体的な住まい方が、高い住生活満足度を支えているのだとすれば、私たち日本人にもそれが可能かどうか。検討してみる価値はあると思われる。

5

幸福な住まい産業の展望

ここまで述べたインテリアと幸福の関係についての見立ては、調査データに基づいたものとはいえ、もちろん学術的なレベルではなんら実証されたものでもなく、仮説の域を出ない。しかし、これからの日本の住まい産業のあり方を展望するための足場は、ある程度示せたのではないと思う。

言うまでもないことだが、ビジネスの具体的なアイデアを考えることは、本研究の目的でも守備範囲でもない。もし考えるとしても、それは素敵なインテリアをあらかじめすべて揃えた空間をそのまま提供するような、モノのビジネスではないことは確信している。むしろそれとはまったく逆のベクトルだろう。幸福な住まいを実現しようとする住まい産業は、住まい手の主体性を引き出すビジネスになるはずである。仮にインテリアをすべて設えた素敵な空間を提案する

にしても、そこで提供されるべきは、受動的に消費される空間ではなく、住まい手が主体的に自分の住まいを良くしようという、意欲を育てるものとして構想されるべきだろう。

当てずっぽうのそしりを覚悟で、手がかりになる話をしてみたい。それは「こんまり」こと近藤麻理恵の片付け術である。彼女は、2011年に刊行した世界的ベストセラー『人生がときめく片づけの魔法』が全世界に発信されるNetflixで番組になったことで、アメリカをはじめ世界中でKonMari(こんまり)として大ブレイクしている。ネットのニュースなどで目にした方も多いと思う。

この本のタイトルをもう一度見て欲しい。「人生がときめく片づけ」である。家のモノを片付けることで、ときめく人生になる、と主張しているのだ。これまで延々述べてきた「インテリアで幸福になる」という本項の主張と、なんら変わることがない。

こんまり流片付け術の核心は、「触ったときに、ときめくか」を唯一の判断基準にしてモノを捨てる／残すを決めるというものだ。祭りと呼ぶ大規模の片付けの後に家の中に残るモノは、すべて心がときめくモノである。毎日心がときめくモノに囲まれて暮らすので人生がときめく、というシンプルで力強い理屈だ。

一つ一つのモノに対して、心がときめくかときめかないかを判断する時、私が向き合っているのは、モノではなく自分自身である。有用性や市場価格などの合理的な基準ではなく、主観的でかつ多分に直感的・感覚的な判断になるだろう。手にとって触れてみるのが重要だと近藤は言う。来週また同じ判断をしたら違う結果になるかもしれない。そのことが示唆するのは、やはり変わることを受け入れる「とりあえずの私」の存在である。そして、捨てる／捨てないの決定を人任せにするのではなく、自分で決めていくという行為は、まさ

に主体的な関与を強く求めるものだ。デンマーク人の住宅との向き合い方とよく似ている、と思わないだろうか。

近藤自身、自分が提供しているのは、物理的な整理収納ノウハウや、モデルルームのようにきれいに片付いた空間などではなく、正しいマインドだと主張している。考え方や生き方や人生が劇的に変わってしまう、と豪語する片付け術が提供するマインドとはいったいなのか。彼女自身の言葉から引いてみよう。

ひとことで言うと、片付けをしたことで「過去に片をつけた」から。その結果、人生で何が必要で何がいらぬか、何をやるべきで何をやめるべきかが、はっきりとわかるようになるのです。(近藤麻理恵、2011年、『人生がときめく片づけの魔法』サンマーク出版)

これからの住まい産業が、理念として「住まいの幸福」を掲げるとすれば、取り組むべき課題は、このような考え方によるものではないだろうか。本当に提供すべきは、ハコでもなく、モノでもなく、スタイルでもなく、ノウハウでもなく、そして確かな私らしさでもない。住まい手の人生を好転させていくマインドだ。住まいの提供を通して、住まい手自身の中にそのマインドを芽生えさせ、育てさせる、何かのサービスだ。

思えば、不動産、建築、インテリアのそれぞれの業にも、それぞれの業のマインドというものがあるはずだ。しかしいつの間にか、不動産業は不動産物件を流通させる仕事、建築業はデザインや建築物を売る仕事、インテリア業はモノを売る仕事、そのように自らのアウトプットを限定してきていたのではないか。例えばコンサルティング・サービスを標榜していたとしても、何をコンサルティングしていたのか。顧客の何を解決していたのか。顧客の矛盾だらけの要望を整

理していただけないのではないか。その点は冷静に振り返ってもよいのではないかと。

最後に、読者に思考実験を提案したい。日本の住まいの幸福をアジェンダとして、不動産、建築、インテリア、それぞれのコンテンツとスキルとマインドを再編集してみたら、住まい産業はどのように再編成されるだろうか。その時に立ち上がる進化した住まい産業のサービスメニューは、いったいどのようなものになるだろうか。そして、それは、日本にどのような住生活の価値を創出していくのだろうか。妄想をしてみたい。

イメージトレーニングとして、こんまりの片付け術が提供しているマインドが、どんな世界をつくっていく可能性を持っているのか、少し妄想をしてみたい。

どこでもいい。舞台はある地域の小さな共同体と仮定しよう。所得に多少のばらつきがあるのは仕方ないだろう。それでも各家庭の家の内側に蓄えられたモノは、衣服にせよインテリアにせよ、機能やアイテムとしてみれば大きな違いはないだろう。

もし、この共同体に属するすべての家庭が、こんまり流の片付け術を体得し極めたとしたらと、イマジネーションを働かせて妄想してみる。さて、どのような世界が見えてくるだろう。

そこは、ときめきだけを頼りに住まいづくりをした世界だ。おそらく各家庭の家の中は、住まい手が主体的に選んだ生き方が反映された、一つ一つ個性的な空間になっていることだろう。その世界の物差しは、住まい手のときめきである。きっとそこは、自分と他人を、所有しているモノの量や値段で比較する必要がない世界に違いない^{※4}。

※4:実はこの妄想を現実にしたような賃貸住宅がかつて東京の豊島区にあった。壁紙が選べるマンションとしてカスタマイズ賃貸のブームをつくったメゾン青樹ロイヤルアネックスである。このマンションが最初にしたことは、賃借人の入居時に大家が自らコンサルティングして好きな壁紙を選べるようにすることだった。すると、好きな壁紙を貼ったことで自分の家に対する愛着が高まり、思い思いに住空間を演出する賃借人が増え、やがてお互いが大好きな家を見せ合うところから住人同士の交流が深まり、奇跡のような賃貸住宅が生まれたのである。そこで大家の青木氏が賃借人に真に提供したものは、原状回復不要の個性的な壁紙ではなく、まさに住まいを良くしようというマインドだったのだ。詳しくは『大家も住人もしあわせになる賃貸住宅のつくり方』(青木純、2013年、学研パブリッシング)を参照。

第 3 章

住まいが 誰一人取り残さない 場所であるために

1

必要なもう一つの視座

本年2019年の4月末をもって平成は幕を閉じ、5月からは新元号に移行する。ポスト平成の名前は現時点（2月）では明らかにされていないが、本報告書が世に出回る頃には新しい時代が始まっている。

ポスト平成の新時代の幕開けを飾る最大のトピックスは、2020年に東京で再び開催されるオリンピック・パラリンピックだ。そして5年後の2025年には大阪万博の開催も決定した。21世紀・ポスト平成のオリパラや万博は、昭和のそれとはまったく異なるものとして開催されることを期待したいが、次々に建ち現れる巨大建築物や膨れ上がる莫大な予算は、まるで1964年の東京オリンピック・パラリンピックから1970年の大阪万博に象徴される高度経済成長時代の昭和の再来を期待するかのような威勢のよさである。

しかしもうそんな時代は戻ってこないことは誰もが知っている。経済成長を否定するつもりはない。ただ高度経済成長の時代がそうであったように、量的な拡大や成長があまねく人々の幸福を約束する時代ではないのだ。トリクルダウンの嘘は暴かれ、「成長がすべ





てを癒やす」わけではないことに、皆うすうすがついている。

IT化と並走したグローバル化の波は、平成の時代に日本の社会を大きく変えた。良い大学を卒業して大企業に就職して、家族をつくり、定年まで勤め上げる人生を成功とするような標準的なモデルは瓦解し、働き方や生き方の自由度は格段に広がり、人々の価値観は多様化した。それは同時に普通という正解らしきものが霧散し、コミュニティや会社組織から切り離された小さく弱々しい個人が、典型的には就職氷河期のようなまったくの不運も含めてあらゆる現実をすべて、自業自得というニュアンスを伴った自己責任として引き受けざるを得ない状況も招いた。所得格差の拡大がもたらす階層化・格差の固定化が社会を分断する現実を前に、私たちの社会はテクノロジーによって切り拓かれる明るい未来に期待をよせながらも、言いようのない不安や苛立ちを胸のうちに抱えている。

そのような時代の節目に、ポスト平成の時代の住まいのあり方を考える「住宅幸福論」として、やはりどうしても、言及しておかなければならないことがあると考えた。

それは「不幸」である。

昨年のEpisode1から今回のEpisode2に続く連作プロジェクトとして、我々は住まいの幸福を議論してきた。しかしデータや事例をもって住まいの幸福を語る時、その裏側には常に不幸が貼りついてきた。今回の調査結果にも不幸は見え隠れしていた。Episode1では石神夏希が「家庭の幸福という呪いを解体する」と題した論考で「寂しさから次の住まいを考える」ことを提案し、幸福を巡る議論が浮ついた風に流されないようにつなぎ留めた。

家売る仕事は、夢売る仕事である。暗い話はご法度だ。業界にたくさんのお金を落としてくれるのは、相対的に裕福で幸福な人たちだ。そうして我々が住まいの価値について語る時は、幸福の

側面ばかりに光をあてがちになる。もちろん生活困窮者のセーフティネットや介護など、もしくは大規模な災害の被災者の救済など、弱者の住宅支援に関する議論はれっきとして存在している。しかしそれは、明らかに福祉の領域の議論であり、不動産、建築、インテリアなどからなる住まい産業が主に扱うテーマではなく、我々は不幸から目をそらしておくこともできた。

しかしポスト平成は、これまで幸福な領域で生きてきた住まい産業も、不幸に無関心ではいられない時代になると予想している。それは住まいの不幸が、これまで明らかに福祉として扱われてきた領域から、じわじわと染み出すように社会全体に広がりつつあるからだ。これまで福祉は公的セクターが扱うマターだったが、公的な福祉だけでは予算も人材も決定的に不足する日はそう遠くない。厚生労働省の統計では、生活受給世帯数は1995年の60万世帯から急上昇し、最近5年は160万世帯を超えて推移している。

社会デザイン研究家の三浦展は、2005年に『下流社会』（光文社）で、1990年代半ばからすでに日本の中流意識の底が抜けるような現象を認め、下流社会という新たな格差社会が始まっていると問題提議をし、社会に大きなインパクトを与えた。三浦はその10年後に「下流社会10年後調査」（『格差固定』、2015年、光文社）を実施した。すると、まさに生活保護受給者が急増していたその10年間に下流は増加し、格差は拡大しつつ固定化していることが明らかになった。自分を下流だと考える割合は、43%に達していた。

そこからすでに5年が経過した現在、格差はさらに広がりながら固定化しているだろうことは体感値として感じる。ここ数年は生活保護受給世帯が頭打ちになっているのは、景気の持ち直しによる就業者数の増加の効果も大きいですが、受給基準を厳密化し政治的に抑制しているためだと指摘する声もある。もし三浦が「下流社会20年後調査」を実施したら、どういう結果が出るかを想像することは難しい。

「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである」とトルストイは言った。しかし現代では、逆にしたほうが実感に合うのではないか。少なくとも30年間の平成を経てこれからポスト平成を迎える日本に関しては、「幸福な家庭はいずれもそれぞれに幸福なものであるが、不幸な家庭はどれも似たものだ」のほうがデータにも合っている。

高齢化。単身化。非正規化。格差の拡大と固定化。下流化。分断化。—光の当たるグローバル化・IT化、個人の自由の拡大の背後に、そのようなベクトルを孕みながら進んでいるわが国の近未来。生活保護のようにお金で解決できる領域の外にも、不幸は広がっている。これまでの定義では福祉が扱う問題とされない社会の課題が、解決しなくてはならないものとして認識されるようになる。これから私たちが経験する社会は、これまで福祉の対象だった領域と市場の対象だった領域が、重なって境目がなくなっている社会だろう。

2

広がる格差と社会の分断、そして無縁社会

平成も半ばが過ぎた2010年に放映されたNHKスペシャル『無縁社会』は、「身元不明の自殺と見られる死者」や「行き倒れ死」など従来の統計ではカテゴライズされない「新たな死」である無縁死（孤独死）が増加している事実を報じ、社会に大きな衝撃を与えた。

番組では特殊清掃業者の仕事現場にも取材カメラが入った。誰にも知られず、引き取り手もないまま孤独に亡くなっていった方々の住まいは、雑然と散らかってはいてもどこか虚ろだった。確かに生前そのままの痕跡はある。しかしそこでどのような暮らしが営まれ

ていたか、本来あるはずの生活感が感じられないのだ。番組では、孤独死を恐れて60歳になる前に老人ホームに入居して暮らす男性を訪ねていた。年齢以上に老け込んでみえたその人がタンスの奥から取り出して見せたのは、かつて働いていたメガバンクの社史と、勤務中に集めた取引先の名刺の束だった。それで思い当たった。あの雑然としながらも空虚な部屋は、おそらく住人が亡くなるかなり前から、時が止まり生気を失っていたのだろう。

家族との縁も切れ、定年退職や病気や勤務先の倒産などの不運により失業することで最後の絆であった職場との縁も切れ、そうして社会といっさいの接点を持たず、わずかな日銭でその日暮らしを続ける毎日を、自己責任の一言で片付けてしまうのはあまりにも無慈悲である。放送後のインターネットには、高齢者だけでなく30～40代の若い世代からも「これは将来の自分の姿だ」という書き込みが相次いだ。

少し前のことになるが、中学高校時代に親友だった同級生の訃報を受け取った。後から聞いた話では、離婚して一人になった後、家に引きこもって酒浸りになったらしい。それで身体を壊してしまった。体格がよく学生時代はスポーツマンで酒も強かった。そんな彼が命を落とすほどの酒を飲んでいた日々は、ゆっくり自殺をするような毎日だったのかもしれない。彼の孤独がどれほど過酷であったのか、いまとなっては知る術もない。「今年は会おうぜ」というお約束の一筆が添えられた最後の年賀状すら、私は探し出すことができないまだ。

厚生労働省『平成30年版自殺対策白書』によれば、日本では1年間に2.1万人（2017年）の人が自殺で命を落としている。3万人を超えて推移していた2000年代初頭からは減少しているものの、同白書がWHOの統計をまとめた結果では、日本の人口10万人あたりの



『無縁社会』

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班（文藝春秋、2010年）

自殺率は19.5(2015年)で、世界で6番目に自殺の多い国に位置づけられる。

日本の自殺者の6割は自宅で命を絶っている。自分がいちばん安らぐことができるはずの場所で、自分の人生を自らの手で終わらせてしまう。住まいにかかわる仕事をする人間として、言葉にならないもどかしさを感じる。どんなに外でつらいことがあってもせめて自分の家にいるときには、優しく抱きしめるように自分を認めて慰めてくれる。家とはそんな場所であるべきではないのか。

この原稿を書いている2019年2月現在、野田市で起きた小4児童の虐待死の事件が連日繰り返して報道されている。女の子は自宅の浴室で実の父親に冷水を浴びせ続けられ命を落とした。彼女にとって家とはどんな場所だったのだろうか。少女がもし別の家に暮らしていたなら、家のお風呂は、明日は友達と何をして遊ぼうかなと考える楽しい時間だったはずだ。あるいは、好きな男の子のことを考えたりする場所であってもおかしくない年頃だ。しかし心愛(みあ)ちゃんにとって、家は地獄そのものだった。

もちろん咎を負うべきは犯人の両親である。度々弁せられた少女のSOSにきちんと対応を取らなかった学校や児童相談所の責任も問われよう。しかし住宅に関わる仕事に就いている人間は、こんなにも痛ましいことが住宅で起こっているという事実には鈍感であってはいけないと思う。両親の虐待によって命を落とした10歳の子供がその短すぎる人生のなかでみつめていた自宅はどのような風景だったのだろうか、と想像力を働かせるべきだ。

厚生労働省の発表では、平成29年度に全国の児童相談所の対応件数は過去最高の13万3778件に上っており、調査開始以来27年連続の増加を続けている。住宅のせいで虐待が起こっているというつもりはない。直接間接の当事者に比べると、確かに建築や不動産ができることはほとんどないかもしれない。それでもなお、住宅がまったく無力で為す術はなにひとつないとは考えたくない。住宅業界は、

住まいのあり方の小さな可能性について真摯であるべきだと思う。

例えば自動車業界をみてみよう。交通事故による死亡者数は、第一次交通戦争といわれた昭和45(1970年)の1万6765人から、最新の統計(2018年)では3694人まで減少している。この間に国内の自動車保有台数は5倍にも膨らんだにもかかわらず、死亡者数を5分の1まで減らすことができた要因としては、歩道や信号機などの交通インフラの整備に加え、自動車の安全技術が大きく進化したことがあげられる。およそ130年前に自動車の原型が発明された後、自動車メーカーは安全技術の研究開発に大きな投資を続けてきた。直近では自動運転の実用化に向けた技術開発に各社がしのぎを削っている。また低炭素社会の実現が大きなアジェンダとして加わり、平成の時代に日本車が世界をリードする形で燃費を飛躍的に向上させ、いよいよ電気自動車の開発へ突入している。

自動車の安全技術の進化を常にリードしてきたメルセデス・ベンツの言葉を紹介しておこう。ここに貫かれているのは、自動車が人間を不幸にするものであってはならない、という揺るぎない信念である。

メルセデス・ベンツの安全技術開発が本格的なスタートを切ったのは、いまから70年以上も前の1939年。開発部門内で、当時はその発想すらなかった「自動車衝突安全性」の研究に着手しました。その後、1969年には実際の事故現場に急行して事故原因を含めた様々な分析・研究を行う事故調査活動が始まりました。そして、現在までに4,200件以上もの調査を行い、ほかに代えがたい貴重なデータを数多く蓄積しています。「オフセット衝突」に対応する衝撃吸収構造ボディ、ABS(アンチロック・ブレーキング・システム)、ダブルファイアーウォールなど、数多くの安全技術がこの活動から開発されています。

また、それらの特許を独占せずに次々に無償で公開してきたのは、自社の自動車だけでなく、世界中の自動車の安全性向上を願うからに

ほかなりません。安全性は単なる技術ではありません。何よりも尊い人間の生命を、何よりも優先して守ることに全力を注ぐ、メルセデスの心そのものなのです。(メルセデス・ベンツ公式ホームページより)

3

幸福な住宅の盲点

もちろん日本の住宅建築も、耐震性能や耐火性能の向上で住まいの安全性を高める努力を長年積み重ねてきたことは正当に評価しなくてはならない。実際には官主導の取り組みであったとしても、そこには自動車産業と同様に、自分が提供した住宅で住む人を幸せにしたい、ましてや不幸になる人はゼロであって欲しい。そのような業界人の願いは確かにあったはずだ。

法的規制と市場の競争の中で、日本の住宅は、堅牢につくった快適な建物に電子的セキュリティを装備することで、危険に対する防御力を高めてきた。最近のタワーマンションでは免震構造で大地震の揺れから建物を守り、自宅の玄関ドアにたどり着く前に、各所の防犯カメラが見守るなか3重のセキュリティを通らなければならぬほどの念の入れようだ。まさに鉄壁の守り。だがしかし、そこに盲点がある。安心安全の概念そのものを見直すべき時代なのだ。ということか。

さまざまな住宅の安心安全対策の根底には、不幸は常に外から襲ってくるものという前提があった。それは、家の中は安全で平和で幸福である、という暗黙の了解の上に成り立つ前提であった。だから内側の幸福を脅かす外部に対して、防御の壁を高く硬く厚くしていけばよかったのだ。しかし現代の不幸は外から襲ってくるも

のではなく、住宅の中に発生するようになってきていることに気が付かなければならない。無縁死も自死も児童虐待も家庭内暴力も、幸福な内部と危険な外部を隔てる安全な壁の内側で起こったことだ。

例えば野田市の事件で、もし住まいがもう少し地域コミュニティに開かれた場所であつたらどうだったのか。もし自殺を選択してしまった人の家が、住む人の心を癒やし、明日に対してポジティブな希望を持てるような場所であつたらどうだったのか。

安心な家が対峙しているのが外の脅威だとすれば、内側の現実には無自覚であつたのではないか。内側の豊かさや幸福を無自覚に前提とすることで、同時に外の世界との関係性に対して無関心になってしまったのではないか。そのような視点で、家のあり方を見つめ直してみることが求められると思う。

例えば、建築家の山本理顕は「一住宅＝一家族」という前提を疑い、住宅を大きな共同体の中の小さな共同体として位置づけ直し、私的空間である専有部と公的空間である共用部の新しい関係がデザインされた集合住宅像を「地域社会圏」モデルとして提案した^{※5}。山本理顕が提唱する「脱住宅」は住まいの持つ小さな可能性への建築からの挑戦と言えるだろう。

実践例も増えている。特に東日本大震災以降のコミュニティへの関心の高まりを背景に、独身の若者限定ではあるものの、シェアハウスという住まい方は居住形態の一つの選択肢として市民権を得た。既存の賃貸集合住宅でも、住人同士の交流や地域コミュニティとの接続をデザインされたリノベーション物件^{※6}はメディアでも注目を集める。

それでも住宅市場全体でみれば、まだまだごく限定的で散発的な取り組みに過ぎない。大多数の住宅供給の現場では「一住宅＝一家族」を疑う新しいコンセプトは、試行されるにも至っていない。

例え建築家がファサードをガラス張りにして外に開いたと主張したところで、結局それは見てくれの問題ではないのか。マンションポ

※5：山本理顕、2013年『地域社会圏主義』INAX出版

※6：代表的な例としては2016年度のグッドデザイン賞の金賞を受賞し話題となった「ホシノタニ団地」(小田急電鉄+株式会社ブルースタジオ)があげられる

エムは「街」という単語を好んで多用するが、そのマンションは街とどのような関係を築こうとしてきたのか。地場業者が売りにする地域密着という言葉は、単に営業エリアが狭いという以上の意味を持っているのか。その共同住宅にはいかなる共同性があるのか。そのシェアは、投資効率のために収入の少ない若者を狭い空間に閉じ込める都合のよい方便ではないのか。

家の内側もそうだ。木のぬくもりをアピールする家は、本当に木漏れ日の差す森のように住む人を癒やしてくれる家なのか。家族の団らんや子育てのしやすさを謳う家が想定している家族関係はどのようなものなのか。住宅メディアもそうだ。得意とする「失敗しない」や「正解」を啓蒙する記事は、「標準」や「普通」が個人の幸福に対して意味を持たない時代に、なんの根拠をもって「成功」や「正解」とジャッジしているのか。

業として住まいにかかわるすべての人間は、自分が使っている言葉を省みたほうがいい。その言葉が無自覚のうちにも前提としている幸福像こそが不幸を生み出しているかもしれない可能性に、謙虚に向き合うべきである。

4

誰一人取り残さない

2015年、国連加盟193カ国は、2030年までに達成すべき目標として、SDGs（エス・ディー・ジズ/Sustainable Development

Goals = 持続可能な開発目標）を定めた「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」を全会一致で採択した。SDGsは、貧困や飢餓の撲滅、再生可能エネルギーや気候変動対策など17の目標とそれを詳細に分けた169のターゲットで構成される行動指針として、加盟国の政府や企業にコミットメントを求めている。日本国内ではまだ知名度が低いことは否めないが、2017年のダボス会議^{※7}においてSDGsの推進には12兆ドルの経済価値と3億8千万人の雇用創出の効果があるという試算が各国のリーダーに共有されたことで、政府が旗を振る形で大企業を中心に徐々に浸透してきた。

SDGs11番目のゴールとして「住み続けられるまちづくり」を戴く住宅産業では、大手ハウスメーカーや大手不動産デベロッパーがSDGsをCSRの軸に据える形で先導している。2018年12月に一般社団法人プレハブ建築協会は「SDGsを見据えたこれからの住宅産業」と題したシンポジウムを開催し、主にレジリエンスの観点で業界への啓発活動を行った。中小地場の工務店の中でも、省エネ性能が高い家づくりを得意とした事業者がSDGsを掲げ始めている。まだ一部の心ある事業者による草の根的な動きではあるものの、断熱性能の向上に業界の関心が向いていることは望ましい流れである。

そのような取り組みを高く評価しつつ、それでもなおあえて強調しておきたいのは、SDGs全体を包括する最も重要な理念の「誰一人取り残さない — No one will be left behind」である。快適で身体に優しく環境負荷の小さい強靱な住宅を増やすために建築物としての家の性能を高めていくことは、むろん重要なことだ。業界の努力には敬意を表したい。ただし、SDGsの観点から考えると、住ま

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 世界を変えるための17の目標



※7:「世界競争力レポート」を発表しているスイスのシンクタンク・世界経済フォーラムが、スイスのダボスで毎年開催する国際会議。安倍晋三首相ら各国を代表する政治家、事業家、知識人などが参加し、経済や環境問題など幅広いテーマを討議する。

いの幸福が高い付加価値の値段を支払える層だけのものであってはいけない。誰一人取り残さない幸福な住まいのあり方を考えてもらいたいと期待する。

住宅が恵まれない弱者の助けになる場所であることと、いま恵まれている人の幸福度をさらに高める場所であること。デンマークをみると、その両方を同時に成立させることが、けっして不可能な要求ではないと知る。

デンマークで注目に値するのは、世帯年収の低さがただちに住宅満足度の低さに直結していないという事実である。世帯年収別の住宅満足度の平均点を比べると、年収がもっとも低い20万クローネ未満(日本円でおよそ334万円未満)の層から年収80万クローネ(およそ1336万円)未満までの層で、住宅満足度の平均点の差は0.37点に収まり、20~40万クローネ未満の層から80万クローネ未満の層まで、満足度にほとんど差がない。しかしそれと同時に、80万クローネを超えると満足度は大きく上昇し、100万クローネ(1670万円)以上になると平均で8点に迫る。つまり低所得層から中間層の社会のマジョリティの住宅水準には大きな格差がない平等さを持ち

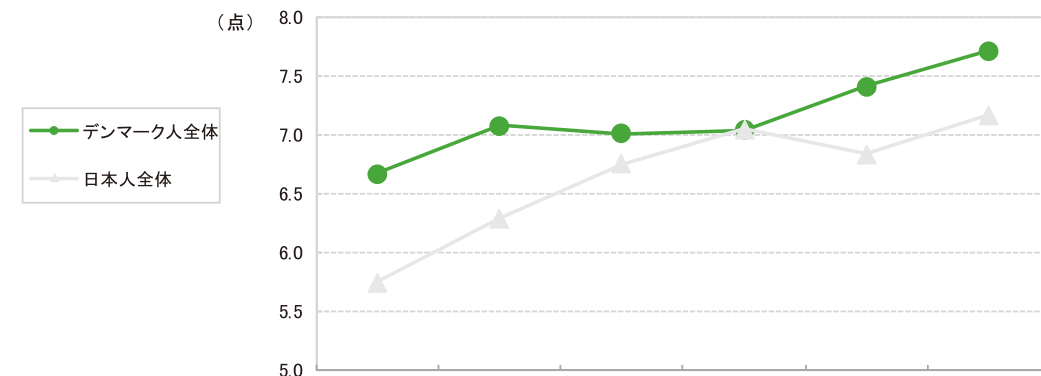
つつも、高所得層のさらに高い満足度は確保しているのである。

対して日本では、もっとも年収が低い層から600万円~800万円未満の層までで年収と住宅満足度がリニアに相関し、800万円を超えると満足度の上昇は頭を打つ。1000万円以上の層ではもう一度満足度が上がっているようにみえるが、上昇幅はごく小さい。デンマークに対比して言えば、日本では高所得層が十分に高い満足を得られていない一方で、それ以外の層では所得の低下に伴う住宅の満足度の低下幅は大きい。社会の大部分を占める世帯年収800万円未満のゾーンで、所得による住宅満足度の格差がもっとも大きくなっているのである(図10)。

このようにデンマークでは低所得層でも一定水準の住環境を享受できている背景には、家賃補助の制度がある。政府や自治体が直接供給する公営住宅はほとんどない代わりに、年収の低い層へは家賃補助を支給し、市場の中で自らのニーズに合った住まいを確保できるようにしている。賃貸住宅居住者を世帯年収別に分け、なんらかの家賃補助を受けている割合をみると、年収がもっとも低い20万クローネ未満の層では70.6%、20万クローネ~40万クローネ未満で57.0%の者が、何らかの形で家賃補助を受給している。

図10:「家」の満足度:平均点(全体/単一回答)

あなたは、「いま住んでいる家」について、どの程度満足していますか。
「非常に満足している」を10点、「まったく満足していない」を「0点」としたら何点くらいになるかを教えてください。



	20万 クローネ未満 (n= 148)	20~40万 クローネ未満 (n= 283)	40~60万 クローネ未満 (n= 199)	60~80万 クローネ未満 (n= 102)	80~100万 クローネ未満 (n= 70)	100万 クローネ以上 (n= 69)
「家」満足度(点)	6.67	7.08	7.01	7.04	7.41	7.72
デンマーク人全体 前カテゴリとの差		0.41	- 0.07	0.03	0.37	0.31

	200 万円未満 (n= 150)	200~400 万円未満 (n= 382)	400~600 万円未満 (n= 405)	600~800 万円未満 (n= 315)	800~1000 万円未満 (n= 224)	1000 万円以上 (n= 247)
「家」満足度(点)	5.74	6.29	6.75	7.05	6.84	7.17
日本人全体 前カテゴリとの差		0.55	0.46	0.30	- 0.21	0.33

デンマーク人-日本人(全体)	0.93	0.79	0.26	- 0.01	0.57	0.55
----------------	------	------	------	--------	------	------

これに対して日本で家賃補助の受給率が最も高いのは、世帯年収600万円～800万円未満の42.1%で、次が800万円～1000万円未満の37.7%である。年収のもっとも低い200万円未満の層で家賃補助を受けているのは20.5%に過ぎず、所得階層別にみてもっとも低い割合となっている。日本では公的な家賃補助はほとんど利用されていないので、これらの家賃補助は主に勤務先の福利厚生によるものと考えられる。

すなわち、福利厚生制度が充実している大企業に勤務する正社員や公務員ほど家賃補助を受け取り（他に寮や社宅もある）、給与も福利厚生も少ない零細企業勤務者や非正規雇用者ほど家賃補助などの支援はされていないのが現実である。また自力で持ち家を買える層には住宅ローン減税があり、昨今の住宅ローン金利と減税幅を相殺すれば、当初10年は実質的に金利ゼロでローンを組むことができるほどの優遇を受けている。さらに、住宅不足の時代に端を発する土地所有者のアパート建設に与えられる大きな税制優遇はいまだに温存され、すでに借家の空室率が20%に達するほど家余りのエリアに節税効果を目的としたサブリース型の賃貸住宅が量産される。住宅セーフティネットのための補助金も、住宅確保要配慮者本人ではなく大家に配られる。

デンマークは税の再配分によって「誰一人取り残さない」住生活を目指していると言えるだろう。対して日本の住宅政策は、資産を持つ土地オーナーと大企業に勤務するアッパーミドル層は直接支援し、相対的な弱者への住宅支援は老朽化した公営住宅が担うというのが基本的な枠組みである。しかも公営住宅の整備は1990年代の行政改革以降、縮小均衡状態で巡航している。希望する公営住宅に入居できない低所得層は、家賃の安い低品質の民間賃貸住宅を

選ばざるを得ない。

高負担によって支えられるデンマークのやり方を、日本にそのまま導入することはもちろんできない。右肩上がりの社会保障負担の増加や消費税の導入で、日本の国民負担率はすでに42.6%、財政赤字を計算に入れると48.7%に達している。これはかつて「ゆりかごから墓場まで」と福祉大国で知られた英国の46.5%に近い水準である。少なくとも現状では、これ以上の負担増に合意は得られないだろう。だが、政府の住宅支援にかかわる予算の配分を見直すことで、全体の負担率を変えないまま弱者への住宅支援を手厚くすることは不可能ではない。言うまでもなく、住宅政策に先立って、日本人がどのような社会を良しとするかという議論が必要だが。

重要なのは想像力だ。少し想像してみて欲しい。あなたがいくら自分で努力した結果で手に入れた経済力で、最高に贅沢で美味しい料理を食べられるとしても、隣のテーブルに飢餓に苦しむ貧しい子供がいたとすれば、そのひもじい視線の中であなたはその料理を美味しく食べることができるだろうか。その子供をハエのように追い払って、何食わぬ顔で食事を楽しむことができるだろうか。少なくとも、不運は誰にでも起こりうる。一つ歯車が狂えば自分もあちら側に座っていたかもしれない、という私たちの幸福の脆さには自覚的であるほうがいい。

各々の個人がすべての人に等しく手を差し伸べることなど不可能だし、そのために稼いで税金を納めているのだと言って、自分を納得させることはできるかもしれない。それでも目の前に困っている人がいれば、同情し助けたくなくなるのが人間というものだ。それは狩猟採

集時代に人類が獲得し、サピエンスに繁栄をもたらした社会性という本能なのだ。人類は弱肉強食ではなかった。大きな獲物を仕留めようとするその瞬間には役に立たないかもしれない弱者をも包摂することで、種としての多様性を担保し、大きな環境変化を生き抜いてきたのである。SDGsの秀逸な点は、強欲ではなく人間の優しい利他的行動こそが、実は世界全体の雇用と富を増大させるという、魅力的なシミュレーションを示したことだ。

日本国憲法第二十五条は「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と生存権を定めている。憲法が保障する健康はフィジカルだけの問題ではないし、雨風がしのげるハコで、テレビやスマートフォンが使えることだけで文化な生活とは言えない。

市場での競争から次々に開発される各種設備機器による快適さや便利さはありがたい。それで日本の住宅は欧米諸国に比べても高機能化して、住宅の効用や住まい手の幸福度をあげてきた。だけど住まいはコンビニじゃない。自動販売機じゃない。家は人間が生きる場所だ。生存に必要な栄養素とカロリーが摂取できるなら食生活はチューブでよい、というわけではないのと同じ理屈は住生活にもあるはずだ。

住生活の満足度が4点未満の層が答えた人生の幸福度の自己評価は、10点満点で平均3.2点と群を抜いて低かったことは、ぜひ記憶に留めておいてもらいたい。住まい産業は多様な人々の多様な幸福を考え続けなければいけないと同時に、不幸からも目を背けてはいけない。

